

MJSK

A

【川柳】

昼月をほかりほかりと連れ歩く

【俳句】

炎天にわかちあふポカリスエット

【短歌】

蒼穹の蜜のひとさじ木洩れ陽を朝食
のヨーグルトに垂らす



MJSK



【詩】
柿の花

小さくて白い柿の花が咲くと
父のいたあの秋を思い出す

ひよいと立ち上がり
庭の木から実をもいで

むいてくれた柿を

歯応えのある話とともに食べたのは
ぽかぽかとあたたかな

小春日和の昼下がり

明日からタキサンの治療が始まる父と
縁側に座って四国山脈を眺めていた

あの時父と私は 二つの柿

小さな白い花の実りを食べてしまったから
永遠にあの風景の中に組み込まれたらしい

何しろ

柿の花言葉は

広大な自然の中で私を永遠に眠らせて
なのだから



MJSK

B

【川柳】

少年は大きな背中をひとりじめ

【俳句】

カステラを四人で分ける涅槃西風

【短歌】

ぽかぽかたとたたくあたまのふたつぶ
んぐわんと揺れるその肩車



MJSK

B

【詩】

くまさんがそこに座って待っていた
小さなトイレの鏡の前に鎮座して

「来る？」って聞いたら来るって
うから

「じゃあどうぞ」ってうちにご招待
小さな歩幅と大きな歩幅

二つの歩幅がかわりばんこに家まで
続く



【川柳】

マスクとる唇で日にふれるため

【俳句】

汲みて来しのち顔洗ふ日永かな

【短歌】

菜の花の黄に鳥かげも子どもらも染
まれりこゑを失はぬまま



MJSK



【詩】
三月のペダル

漕ぎだした時に着ていた
それぞれの上着をもう脱いで
三人で順ぐりに
先頭を走りつづけて
まだ着かないの
の声を振り落とすために
ときどきは
斜面に座り込んで
ほとんど誰ともすれ違わずに
ぽっかり広い川幅の
白くてぬるい光のなかをずっと
進んでゆく
たぶん
行き先は決まっている
いや、
決まっていない
休憩のとき
二人はコーラ味のチョコボールを
わたしはバナナを食べながら
どこかに着いた後のことを
それぞれの言葉で話す
ちよっと涼しくなってきたし
上着を着ようね。



【川柳】

「ばかやろう！」笑う師匠の目が怖
い

【俳句】

心太押す女子力やアルバイト

【短歌】

君が弾くギターの音色
擦り切れたカセットの底まだ残って
る



MJSK

D

【詩】

「ほかほか」

ずいぶんほかほか
してきたな

こいつは一体何だろう
春だとおもってたのに
通り越しておれは
こんな小さな街に来ている

通りすがりの小さな家
窓が少し開いている

ふと覗くと
去年死んだはずの老父が
小さな女の子とオセロをしている
そのオセロ台は
僕が子供の頃買ってもらった
あのオセロだ
緑色の地布の傷で分かる

無花果を煮る匂いがしている

